

## 「時空を超えた洗濯の話」

奈良女子大学 生活環境学部

後藤景子

人類の洗濯の歴史は古く、古代エジプトの洗濯風景やポンペイ遺跡の洗濯屋はよく知られています。また、紀元前 3000 年代のメソポタミア・シュメール人の楔形文字粘土板にみる記録や古代ローマのサポーの丘の「汚れを落とす土」など、石鹼が洗剤として古くから認識されていたことがわかります。日本でも古事記や万葉集に洗濯に関する記述があり、むくろじの果皮やさいかちのサヤを洗剤として利用していたと考えられています。古来、洗濯作業にかかる時間と労力は大変なものでしたが、1797 年にヨーロッパで洗濯板が発明され、明治中期に日本に伝わり、たらいとともに洗濯には欠かせない大切な道具となりました。そして、手絞り機や手動式洗濯機を経て、20 世紀についに電気洗濯機が登場しました。



最近、日本では家庭用洗濯機が急激に変化しています。昭和 5 年に国産の洗濯機第 1 号が発売され、その後長い間洗濯槽にローラ絞り機が付いていましたが、昭和 30 年代に遠心脱水槽付二槽式洗濯機、続いて全自動洗濯機が開発されました。2000 年以降は従来の縦型洗濯機に加えてヨーロッパタイプのドラム型洗濯機が導入され、2009 年には全体の約 30%が乾燥機能を備えるようになりました。そして今では、除菌脱臭機能などの付加価値を備えた機種が多くあります。



昭和5年  
国産洗濯機第1号  
370円 (初任給70円)



昭和30年～  
噴流式→渦巻式  
ゴムローラー付き洗濯機



昭和35年～  
二槽式洗濯機



昭和60年～  
全自動洗濯機



平成10年～  
縦型洗濯乾燥機



平成15年～  
回転ドラム式洗濯機

このように家庭用洗濯機の多機能・付加価値化が進行して行く中で、洗濯機開発の大きな流れは大容量化とそれに伴う節水化です。この背景には、水を大切に使う社会の構築を目指して、節水機器・技術の普及や節水意識の向上が図られているという現状があります。生活用水の2割弱が洗濯に用いられている現状を考えますと、節水洗濯は水資源保全に一定の役割を果たすでしょう。しかしながら、過度な節水は、洗いムラ、汚れの再付着、衣類の損傷などを引き起こす原因になります。また、節水洗濯は洗剤の標準使用量を曖昧にし、消費者の洗剤の少なめ使用が汚れ落ちを低下させる傾向も出てきました。日本の洗濯習慣は「汚れたら洗う」ではなく「着たら洗う」であり、過度な節水洗濯に歯止めをかけるためには洗濯物の量を削減することも大切ではないでしょうか。

**大容量化**  
1kgで1万円

洗濯物の増加

着たら洗う

**節水化**  
回転ドラム式

洗浄ムラ  
衣服の損傷

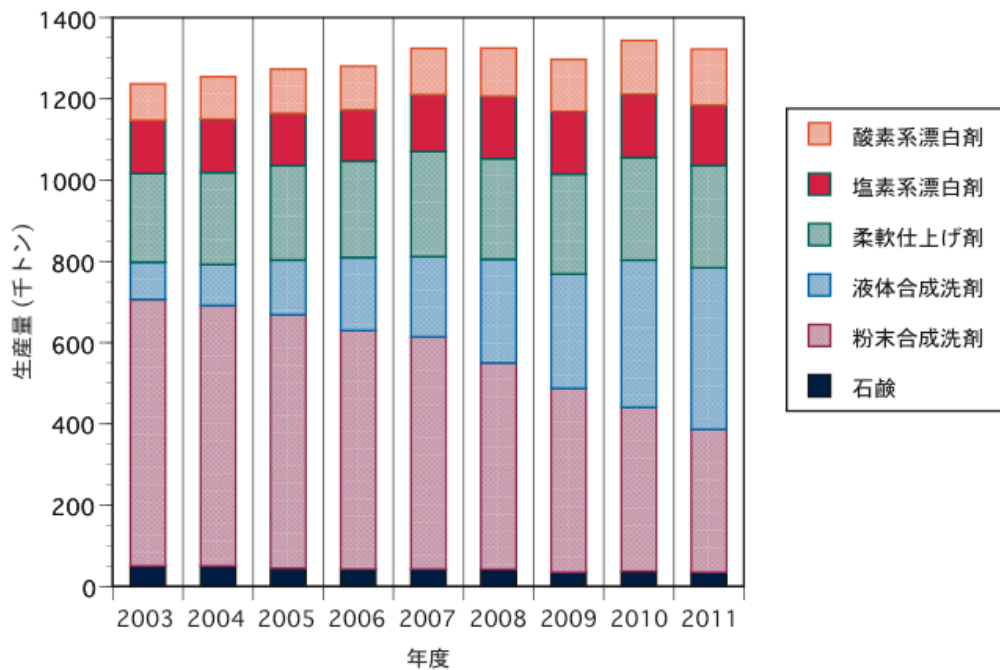
洗剤の標準使用量

**多機能化**  
洗いから乾燥まで

電気代  
衣服の損傷

資源とエネルギー

洗濯機のみならず、衣料用洗剤も変化しています。洗濯時の泡立ち抑制、すすぎ時の泡切れ促進、布間の摩擦低減、布の白度維持、洗い上がりの衣料の風合い向上や香りづけなどを目的として様々な工夫がなされており、洗剤においても高機能・付加価値化が開発の主たる動向となっています。最も大きな変化は、粉末洗剤に替わり液体洗剤が主流となったことで、2009年にはすすぎ1回タイプの超濃縮型液体洗剤が開発されています。



日本石鹼洗剤工業会統計 [http://jsda.org/w/00\\_jsda/5toukei\\_1.htm](http://jsda.org/w/00_jsda/5toukei_1.htm)

上記の日本の洗濯事情と比較して、欧米では週1回程度の洗濯が普通で、衣料の色別の洗剤が市販されていますが、コンパクト洗剤は日本ほど多く用いられていません。また、家庭洗濯機の普及率は日本ほど高くなく、共同の洗濯場が多く見受けられます。洗濯水の硬度が高いため温水で洗い、洗濯物を屋外に干さずに加熱乾燥するのが一般的です。



洗濯は時空を超えた人の営みであり、国や地域の歴史と文化を映し出しています。